

# 高麗の囲碁旅行

「高麗川に 落す涙や 美女の花」

碁楽連理事 刀根 正樹

山里は、梅が満開である。うぐいすが鳴く。私は橋の上にたたずみ、高麗川の清流を眺めていた。おびただしい数の花が流れている。彼女らは歌い、舞い、去って行く。「古代朝鮮の美女が、舞っている」と私はつぶやいた。

百済は、新羅と唐の連合軍に破れた。義慈王が捕虜となり、船でつれ去られるのを悲しみ、三千人の官女が岸辺を走り、落花石の断崖から白馬江へ、花が散るように身を投げた。時空を越え、彼女らの霊は、白い花片となって高麗川に舞う。

近くの高麗神社に参拝した帰路であった。高句麗もまた新羅に亡ぼされたが、その亡命者がこの地に帰化し、領地を与えられた。高麗王若光を祭り、霊現あらたかといわれる。私は碁が強くなることを願った。神社の奉納者の中に、太宰治の名があった。幽霊のように薄くかすれた墨の跡だった。何年か前、彼もこの橋に立ち、高麗川の流れを見たであろう。そして玉川上水に美女と入水した。ここから少し川上に、巾着田というお花畑があり、春はレンゲ、秋には彼岸花と呼ばれる曼珠沙華が、日本一の規模で咲き乱れ、人々の霊をなぐさめる。



高麗神社

「高句麗の 歴史語るか 彼岸花」 私は、高麗川を逆登って見たいと思った。美女の霊に誘われる気がした。歩くのがおっくうで、電車を利用しようと思った。八高線の高麗川駅から東飯能に行き、西部秩父線に乗った。バッグから、李昌鎬(イーチャンホ)の本を取り出した 「刀根さんは忙しくせわしい人ですね。碁では、もっとゆっくり、ゆったり。枝葉末節にこだわらず、本手を打って下さい」と李昌鎬が語りかけてきた。全羅北道全州の出身である。百済の末えいであろうか。世界チャンピオンに何度も輝いている。「私の碁は、攻めより守りに特質があります。それは碁を覚えた頃から変わらず、私の碁の本質です。守るべき所は、しっかり本手を打って守る。それを理解して下さい。

あなたは、私の本を幾冊も読んでいただきましたが、守りを放置して、死に急ぐところがあります。太宰治とよく似ていますね。」

電車は高麗川にそって、高度を上げて行く。早春の山肌が行く手に迫ってくる。眼下には高麗川の急流が岩を噛み、うねうね蛇行する。各所に梅が咲き、遠くの街道を、無数の車が懸命に走っている。女子高生が二人、乗車してきた。高麗系の顔立ちをしている。目が切れ長で鼻が高い。姿勢がすらりとしていた。

「本手、本手」とつぶやきながら、私は頁をめくり、また景色を眺めた。「君には、難しすぎる本だよ」と友人が笑った。こうして読み続けていると、確かに内容の難しい本であった。どれが本手か、なかなか判らなかつた。しかし やがて、体の中を突き抜ける感動と爽快感があり、幸福を覚えるようになった。「モーツアルトの音楽と、同じ調べだ。モーツアルトの旋律を、碁に生かしている。」と 私は叫び、心から喜んだ。

突然行く手の崖に、沢山の墓が並んでいた。碁盤に並んだ石のようであった。高麗の人々の墓地なのか。 電車が進むにつれ、あちこちに寺墓地が現れた。川の中に浮かぶ大岩の上に、白い石仏がいて、私を見詰めていた。芦ヶ久保という駅では、丘の上に立つ、巨大な青い仏像が、鋭い目で、私をにらんでいた。人々の霊を守っていた

秩父駅に近づいたとき、左手の西空に、巨大な武甲山がそそり立った。大仏によく似ていた。行けども行けども西の空を占領していた。李昌鎬のようなスケールの大きな山だ、と思った。

「武甲山 両肩怒らせ 親父づら」

秩父駅前の仲見世で、田舎風の娘が、人肌に温めた日本酒をすすめた。娘はにこにこ笑った。「君の胸に抱いていたのかね」

秩父市をほろ酔いで歩きまわったが、寒風がこたえたので、また電車に乗った。武甲山がずっと見送っていた。急に眠気が来て、しばらく意識がなかった。飯能に着くと、マスクをした喪服の女性が話かけてきた。これから葬儀に行くのだが横浜線への道がわからないといった。私は八王子駅のホームとエスカレータの地図を書いて渡し、もっと話したがる女性と別れた。本を読むべく一人最前の車輻に乗り込んだ。

八高線を南下し、平野に出た。奥多摩の山並が、夕焼の中に黒々と浮かんだ。高麗の里は、すでに遠ざかった。「私もまだ老け込むつもりはありませんが、最近の若手は、中

盤の打ち方が非情に激しくなりました。特にイセドル九段の棋風は、私とは正反対できわめて実戦的な打ち方です。私は以前から好んで戦いを仕掛けることはありませんでした。最近の流れが、それを許さなくなりました」と李昌鎬がぼやいた。

八王子駅に着いた。私はエスカレーターに乗った。横をあの女性が駆け抜けて行った。黒い大きな帽子に、黒の喪服。マスクは外していた。ふり返った顔は、高麗系のすてきな美人で、何故か、目に涙を浮かべていた。

「高麗のひと 瞳うるませ 去り行きぬ」

(碁楽連だより 3月号 第223号 2010年3月1日)